

## フランス語の心理・感覚動詞再考-心理・感覚の主体とは何か？-

川上 夏林  
(京都大学大学院)

従来、心理・感覚動詞は、経験者(experiencer)が現れる統語的位置の違いから I 型(主格型)、II 型(対格型)、III 型(与格型)に分類されてきたが、特に統語構造と意味役割の関連をめぐって II 型心理・感覚動詞の意味構造が問題にされてきた。しかし、なぜある動詞が心理・感覚動詞とみなされるのか、心理・感覚を表すとは何を意味するのかという根本的な問いが残されたままである。そのため、心理・感覚動詞の定義が曖昧になり、その数は膨れ上がる結果となってしまった。本論は、次のような発話状況密着型の現象に焦点を当て、真の心理・感覚が〈わたし・いま・ここ〉と密接に結びつくことに着目し、以下の点を明らかにする。

a. Ah, ça pique !

b. Ah, ça m'énerve !

状況と身体インタラクションが〈心理・感覚の主体〉の具現化に影響を与え、〈心理・感覚の主体〉が文構造を捉えるための一つの重要な概念であること、心理・感覚動詞と見なされてきたものの多くが〈わたし・いま・ここ〉から離れ、俯瞰された心理・感覚を描写するという点において真の心理・感覚動詞ではないこと、そして経験者は一括して論じることのできない存在であることを示す。